

日本に無事に帰ることができたのは、不幸中の幸いであつた。

故郷喪失、そして

東京都 大友 康 弘

昭和二十一年三月三十一日、台北から基隆の港に向かう引揚げ列車に石が飛んで来た。「早く帰れ、……」の罵声、見れば台湾人の子供が「アカンペー」をしている。

敗戦国民の悲しさ、いったい我々、日本人は何をしたというのだ。長い統治の反動が少年の心に焼きついでるの暴言なのだ。

波止場に向かう路地上に銀のカップが捨てられているのを見た。また、紙幣が破られ、海に浮いていた。厳しい検査云々のデマにおびえながら、ここまで持つて来て遂に捨てなければならなかった人びとの胸中は如何に。

乗船したのは夕方に近かつた。

ポーウ、ポーウ。哀愁切々たる出港の汽笛、刻々船は岸を離れる。夕闇せまる彼方に薄れゆく山々、デッキから身を乗り出して見つめる子供たち、一瞬たりとも目をそらすまいと。生まれて十四年、少年を育て育てきたふるさととは今、そのいとし子と意志なき離別を強いられようとしている。

よろこびの地を・たからの土地を・追われ追われて・行先もない・国の中にも・国の外にも・

と、少年たちの間から期せずして合唱が起こつた。「さうらば台湾よ、また来るまでは」

戦いの生んだ別れの歌だった。そして、このメロディーは人々の心をゆさぶりながら、故郷の灯が闇の中に没するまで続いた。

浦賀の駅を出た引揚げ専用列車に、まもなく、気負い立った他の乗客たちが窓を乗り越えてなだれ込んで来た。おびえて泣く子供の声に、ある引揚げ者が言った。「自分たちは船旅で疲れているんだ」すると、魚臭のにじむカゴを背負った男が言った。「俺たちは毎

日こうして立っているんだ」。誰も何も言わなかった。その沈黙の中に、私は明日からの生活を思い浮かべていた。

旧刑務所を改造した住宅の畳もない板の間に、四つの行李とフトンがぼつんと置かれている。そして一人千円を支給された。

東北の寒村は、外地で半生を過ごした老人と十四歳の少年に職をあたえてくれるところはなかった。

秋も深まる頃、私は殺人列車に押し込まれて仙台の建設現場へ、仕事は地面を一メートル掘っていくら、という土方作業。私が昼休みを惜しんでやってもおとなの量には及ばなかった。それでも一か月たつて手にした初めての賃金は、家族の何週間かの生活を支える額になっていた。

やがて迎えた東北の冬、初めて見る雪や霜を踏んで、ズック靴で家を出る。凍傷の耳タブが痛い。一月、二月、地面はカチカチに凍って、打ち込むツルハシもスコップも跳ねかえってくる。昼の弁当を開くと大根入りのカユは半ば凍っていたが、家族には昼食はあたら

ない。

春が来て間もなく、私は仙台駅前の無料検診で肋膜炎と宣告される。今度は母が代つて行商を始める。けなしの衣類を資金に、農家をまわつたが、まだ土地の言葉になじめない母の商いは、僅かであった。私は闇米のかつぎ屋に加えてもらい、大阪まで足をのびした。片道二十四時間、席のあろうはずがない。一升三十円が二百円になったが、没収されることも多く、続かなかつた。

一方、引揚げ後の虚脱状態から抜けた父は、カヤの原野に目をつけ、水田造りへと仲間を誘い、開墾を陳情、しかし屋根ふき材のカヤを確保する理由に地元の反対は強く、父はやむなく進駐軍当局まで出向いて食糧増産の優先を説き、ようやく許しを得た。

鎌を打ちこむと、カヤの根は深く網のように絡みあつた土壌で、一枚のゴム板の如く運動して遠くのカヤまで動きその根は容易に絶ち切れなかつた。父は重労働と栄養不良で夜は目が見えないと、つぶやき、鳥目になつた。

それでも頑張つて田圃を造り、田植えは竹のヘラで一本々々穴を開けながら苗を植え込んでいく。それでも秋には四反で十二俵の収穫があった。

再び冬がしのび寄る。私は意を決して、神戸の叔父を頼つて家を後にすることにした。「夜学に通いたい」父は黙つて一つの竹行李を買い求めてきて、フタの裏に「男子立志出郷関」と書いた。

製鉄所の寮に着いた時、ポケットには七円あまり、でも給料は良い、仕送りもできる。仕事は八百度の高熱で燃える炉の前で鉱石を投げ入れる、まさに男のために生まれたような作業、時おり肋間神経痛が起きるが休むことはない。

母も病院の附添婦として勤めることになったと明るい知らせが届く。

妹も寂しいだろうが、もう少しの辛抱だ。

十五歳の暮、神戸の街は暖かく、除夜の鐘が終るまで書き綴つた日記の終りに、「努力は天才に優る」と気負つて書いた。

縦断爆撃と戦後の苦勞

東京都 木村 楠 男

昭和十九年夏だつたと思うのだが、疎開先より台北市内へ行き、爆撃を受け、五分早くその場を離れたために命拾いをしたことがあつた。その日太陽は落ち、闇がまわりを包み始めた頃、台北市の方角から一本の火柱があがつた。大きな火柱が。それが合図かのように、両端から真ん中へ向かつて、次から次へと火柱が立ち始めた。大きな花火のような火柱だつた。その頃良く云われていた縦断爆撃かもしれない。土手の上から台北市を眺め、暗闇に映える炎をきれいだなと思ひ、何も普通の家を焼くことはないじゃないか、と複雑な気持ちで立ちつくしていたことを、はつきりと覚えてゐる。

昭和二十一年三月、引揚げのため爆撃の傷まだ癒えぬ台湾総督府に集結、四月初めに和歌山の田辺港に上